シーワールドのアニマル達

●モモイロペリカン

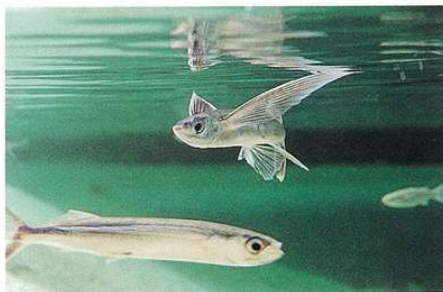
モモイロペリカンはヨーロッパやアフリカなどに生息していて、その名前のとおり全身が淡いピンク色で、長いくちばしと黄色い「のど袋」が特徴です。当館の5羽のモモイロペリカンは、ペリカンの池で4羽のコシグロペリカンと共に生活しています。7年前に当館に来たばかりの頃は、まだ幼鳥で人にも慣れていなかったので不用意に近づくとくちばしを大きく開けて威嚇することがしばしば見られました。今では人にも慣れ、頭の後ろの飾り羽ものびてすっかり一人前の姿となり、1日に2回行っている園内散歩の時も、落ち着きなく列をみだすコシグロペリカンを尻目に5羽そろってきれいな行進を披露しています。実物を前にした子供たちからは、もっと小さな姿を想像していたのか、翼を広げると3mにもなる姿に「わぁ、大きい！」という驚きの声があがっています。しかし、大きいオスでも体重が10kgほどであることをペンギンと比較して説明すると、観客はペリカンの軽さに驚いています。今年の春は、2組のペアーが池のかたわらに小枝や枯れ草を集めるなどの営巣行動が観察されていることから、そろそろ2世誕生の期待が寄せられています。

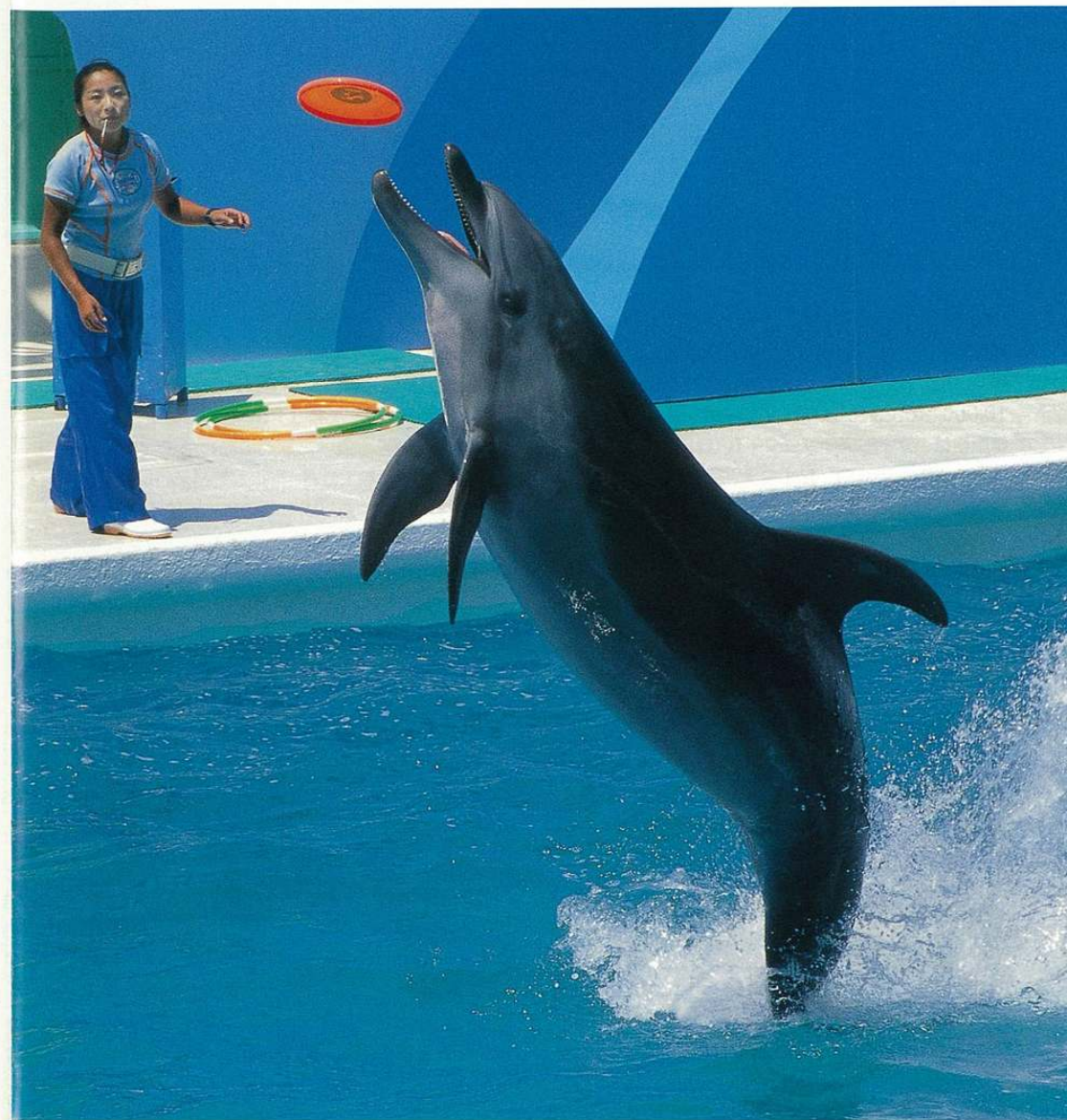
（村松）

▲モモイロペリカン *Pelecanus onocrotalus*

●トビウオ

トビウオは、温帯から熱帯の暖かい海に住む表層魚で、房総では6月から9月に多く見られます。大きな胸びれを広げて水面をグライダーのように滑空することでも有名ですが、飼育が難しく水族館でも滅多に見ることができない魚です。そこで、トビウオの展示を計画し、鴨川の定置網漁船に乗船してトビウオの体を傷つけないようにビニール製のたも網で一尾ずつ丁寧に採集しました。トビウオは非常に神経質で餌付けも一苦労です。なんとか餌付けしても一度に少量のエサしか食べないため、細かく刻んだ魚肉やアミなどを一日に5回から7回も与えます。また、同居している大きな魚に追われたりすると水そうの外へ飛び出してしまいます。採集して半月から1ヶ月後の6月、予備水槽でエサを食べ始め元気になったトビウオを外敵のいないトロピカルアイランド「エメラルドの入江」へ移動し展示を開始しました。当初心配していた飛び出し事故は一度だけでしたが、係員の目の行き届かない夜間に浅瀬へ乗り上げてしまうことがしばしばありました。そこで夜間に、乗り上げ防止柵を設置したり、光に集まる性質を利用して水そうの中央部を明るくするなど、浅瀬への乗り上げ事故防止を行っています。今では、胸ビレを大きく広げたトビウオの姿に、お客様から「ワァー！トビウオ」「きれい」などの歓声が聞かれます。

（根岸）

▲トビウオ *Cypselurus agoo*

さかまた No.58 （禁無断転載）

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(0470)92-2121

http://www.mitsuikanko.co.jp

発行日 平成13年12月

さかまた

鴨川シーワールド NO.58

水族館の生き物たちの食事風景

▲「エメラルドの入江」でのサンゴ礁魚類へのまき餌

鴨川シーワールドでは、シャチやアシカなどの海獣類、ペンギンやペリカンなどの鳥類の他、魚類やカニ・クラゲ・ヒトデなど約800種、約10,000匹の生き物を飼育しています。生き物の食事風景は、フィーディングタイム（食事時間）としてペンギン、ラッコ、セイウチ、アシカ、アザラシなど一部の動物についてご覧いただいていますが、その他の生き物たちにはどんなエサをどのように与えるのだろうと不思議に思われているのではないでしょうか。そこで、飼育係が知恵をしぼって生き物の習性や食性に合うように工夫した「生き物たちの食事」についてご紹介しましょう。

■エサの種類と量

水族館で最も多く使っているエサは、サバ・アジ・ホッケなどの「冷凍魚」です。その他にドライフードやフレイクなどの「人工餌料」、野菜や海そうなどの「植物性餌料」、プランクトンやアミ類などの「活き餌」などがあります。これらのエサを生き物たちの習性や食べ方などにあわせて、栄養バランスよく様々な大きさ、形にして与えています。海ではクラゲやヒカリボヤ等を食べているマンボウには代用食として、エビ・カキ・マグロなどをミキサーにかけた特別なねり餌を与えています。ちなみに、大食いチャンピォンはシャチの「ビンゴ」で、1日に110kgものホッケを平らげます。シーワールドの生き物たちが一日に食べるエサの量はなんと1,300kgにもなり、飼育係は毎日、食事の準備に追われています。

▲たくさん食べてネ、育児中の「ステラ」は大食漢

▲水中のエサをさがすコシグロペリカン

■イルカやアシカなどの食事風景

イルカやアシカなどには、冷凍魚を解凍して定められた量を一頭ずつに与えています。エサの入ったバケツを運ぶ係員の姿が見えると、イルカは大きくジャンプしたり水面から顔を上げたり、またアシカやアザラシは柵の前で勢ぞろいして「まだかな？」とエサの準備をする係員のしぐさに釘付けとなり、プールの回りは一気に騒がしくなります。食事をするときには、いくつかの約束事があり、体の小さな個体や力の弱い個体が、強い個体に邪魔されずに安心して最後まで食事が出来るように食事の場所を決めています。アシカやアザラシでは、自分の名前をちゃんとわかっていて、1頭ずつ名前を呼ばれると水中で遊んでいても陸へ上がり、決められた場所で食事をします。その中で1番最後までゆっくりとエサをもらっているのが、たいていその飼育施設の中で1番強い個体です。雄同士の争いがある繁殖期には一晩でその順位が入れ替わってしまうこともあるので、エサを与えるにも毎日の観察がとても重要になります。

ラッコは、係員が貝やイカなどのエサを差し出すと小さな両手を伸ばして受け取ります。そして、さも一気に食べてしまったかのような顔をして次から次へとエサを要求します。しかし、エサはわきの下のポケット（皮膚のたるみ）にしまい込んでいて、ポケットがいっぱいになるとお腹の上に広げておもむろに食べ始めます。自分の嫌いなエサは、水中に落として同居している魚のエサにしてしまったり、時には他のラッコに手渡しであげてしまうこともあります。

ペリカンは小魚を投げて与えると、くちばしの袋を広げてまるで大きな網で虫を捕まえるかのように見事にキャッチします。また水中に落ちたエサは水ごとすくい取り、器用に水だけをくちばしのすき間から捨ててエサだけをのみ込みます。

■魚の食事風景

一般に、魚たちの食事は水そうごとにまき餌をします。エサの量やメニューは魚の種類や大きさや数に応じて決めますが、飼育係はエサの大きさや与え方にさまざまな工夫をしています。多くのサンゴ礁魚類を飼育しているトロピカルアイランドの大水そうでは、食事の時間になるとシイラやスギなど体の大きな魚や泳ぎの速い魚がわれ先にと集まってきます。飼育係は、エサが全ての魚にいきわたるように大小さまざまに切り分けて注意深くまき餌をします。それでも充分に食べることができないマダラトビエイや水底のトラフザメなどにはダイバーが潜水をして直接与えます。他に、コブヒトデなどヒトデの仲間では、体をひっくりかえして中央の口にエサを置き、再び元にもどして食べさせます。海そうを好んで食べるハギやブダイの仲間には、代用食としてレタスを水中に沈め与えています。発光魚のヒカリキンメダイは、眼の下に発光器を持っていてエサなどの刺激によって光ります。自動的にエサをまく装置により、常に生きたプランクトンを食べられるように工夫をし、多くのお客様にヒカリキンメダイの幻想的な発光を見ていただいています。

水族館の生き物の「食事」について紹介しましたが、この次水族館を訪れて、生き物たちの食事風景をご覧になった時には、パフォーマンスとはひと味違った驚きと新たなる発見があるかもしれません。

（金子、齋藤）

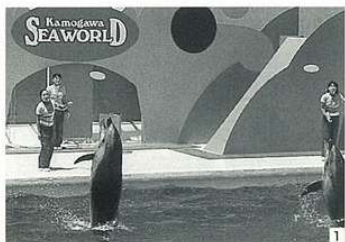
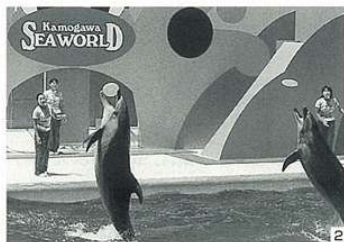
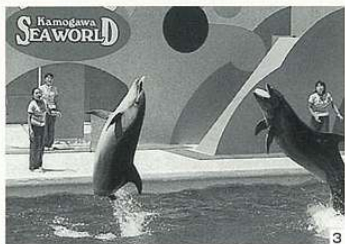
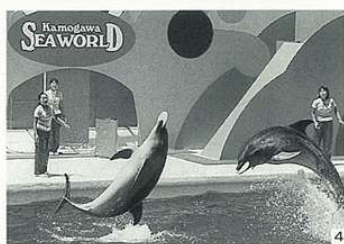
▲「あっ、食事の時間だ!!」ジャンプするイルカたち

▲ダイバーからエサをもらうマダラトビエイ

トピックス

▲イルカのフリスビー

5月24日、イルカの新パフォーマンスがスタートし世界初のドルフィンフリスビーを公開しました。この種目は、トレーナーが投げたフリスビーをイルカがジャンプして空中でキャッチするというもので、公開の約半年前から毎日訓練を行ってきました。一番の苦労は、日に日に上達していくイルカ達に対してフリスビーを投げるトレーナーの腕前が追いつかず、イルカとのコンビネーションがうまくとれないことでした。そこで、私たちトレーナーはフリスビーを持ち帰って正確に投げる練習をする日が続きました。また、風は大きな悩みでした。風が吹くとフリスビーが思いもしない方向に飛んでしまい、イルカは身をひるがえしてキャッチしようとするのですがうまくいかないのです。しかし、イルカとトレーナー双方の特訓の甲斐あって、無事パフォーマンスとしてお客様に披露することができるようになり、今ではイルカパフォーマンスに欠かせないメイン種目となっています。フリスビーを投げるトレーナーの絶妙なコントロールとそれを上回るイルカたちの運動能力の高さを是非ご覧下さい。

（山田か）

▲生後１ヶ月の「アイ」

8月4日にトドのルイ（8才）がメスの子どもを出産しました。今回はロッキースタジアム「トドの海」で、オスのノサ（23才）、メスのモリー（7才）、ルイの長女レイ（4才）が同居する中での出産、子育てとなりました。出産直後、興味深そうに子に近づくモリーやレイは、神経質になっている母親のルイに威嚇されては逃げていました。これとは対照的に父親のノサは全く関心がなく、むしろ親子を避けているようでした。授乳は順調で、生後3日頃から子は母親の周りを自力で動き始めました。5日目に母親のルイが目を離したすきにプールに落ちてしまいましたが、子の鳴き声に気付いた母親はすぐに首のあたりをくわえて陸に引き上げました。生後9日目になると自分から水の中を覗いたり浅瀬で遊ぶようになり、水中から上陸も出来るようになりました。17日目には、潜りも上達し、3ヶ月たった今ではプールの中を自由自在に泳ぎ回っています。また名前は一般公募により「アイ」に決まり、パフォーマンス中は母親ルイの隣にぴったり寄り添い、お客様の視線を釘付けにしています。

（藍野）

▲鳴き合う親子（生後2日目）

▲岩登りに挑戦する「アイ」（生後３ヶ月）

●バンクーバー水族館に協力

平成13年7月31日にカマイルカ1頭（オス）をバンクーバー水族館（カナダ）へ輸送しました。このイルカは名前を「スピン」といい、バンクーバー水族館から依頼をうけて、一時当館で預かっていたもので、輸送前に体調をこわさないよう万全の体制で飼育にあたりました。輸送はトラックと航空機を使い、バンクーバー水族館のスタッフ3名と当館の1名が付き添いました。輸送中は体が乾かない様に時々水をかけたり、呼吸・心拍・体温をチェックしながら約19時間かけて、無事バンクーバー水族館に搬入しました。沢山の人に歓迎された「スピン」は、以前から飼育されているメスのカマイルカとともにこれから人気者となることでしょう。

（井上）

●子シャチの「ララ」近況

今年の2月に生まれた子シャチの「ララ」は、生後9ヶ月が過ぎ順調に成長しています。生まれた時は母親「ステラ」のおなかの下にぴったりと寄り添っていた「ララ」ですが、今ではステージを歩いているトレーナーを追いかけて、胸ビレを振ってみたり、口を使って上手に水をかけたりと色々な遊びを覚え愛嬌を振りまいています。また、時には元気よくジャンプをして約2.7mに成長した全身を見せてくれる事もあります。授乳は続いていますがほとんど歯も生えそろい、母親の口からこぼれてくるエサをくわえて遊び、1日に数本のホッケを呑み込むようになりました。これからの成長が楽しみな「ララ」、姉「ラビー」とともに皆様も応援して下さい。

（山田千）

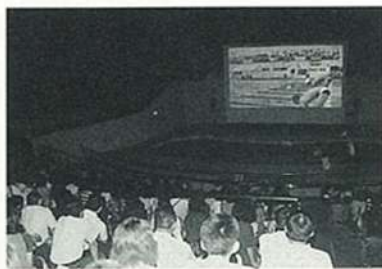
●特別展示、「上手に子育て」

ー魚介類の子どもを育てるー

平成13年7月より、魚介類の子育てをテーマとした特別展を開催しました。卵からふ化した魚の子どもを育てるには、特別の水槽を準備したり、生まれた子どもが食べる生きたプランクトンを育てるなど、なかなか大変です。そこで、水産試験場や栽培漁業センターの協力を得て、水そうで育ったマダイ、ヒラメ、スズキ、サケ、アワビなどの子どもを展示し、魚介類の子育てを分かりやすくパネルで紹介しました。また、魚介類の親子合わせパズルや平安時代からある遊びを利用した貝合わせによる魚名の漢字当てゲームを取り入れ、子どもから大人まで大変好評でした。

（大澤）

●東宝映画「ウォーターボーイズ」試写会開催

鴨川シーワールドがロケ地となった東宝映画「ウォーターボーイズ」の特別試写会が、8月31日にロッキースタジアムで開催されました。当館で映画の試写会が行われたのは初めてのことです。この映画は、“男のシンクロナイズドスイミング”というユニークな題材をもとに制作された、さわやかな青春映画で、竹中直人さん演じるイルカトレーナーが妻夫木聡さん（主役）らの演じる高校生たちを鍛える舞台として鴨川シーワールドが登場します。9月15日からの一般公開を前に行われた試写会では、矢口史靖監督の舞台挨拶の後、一般公募によりご招待された500名を越すお客様が夏休み最後の夜を映画鑑賞で楽しみました。

（桐畑）